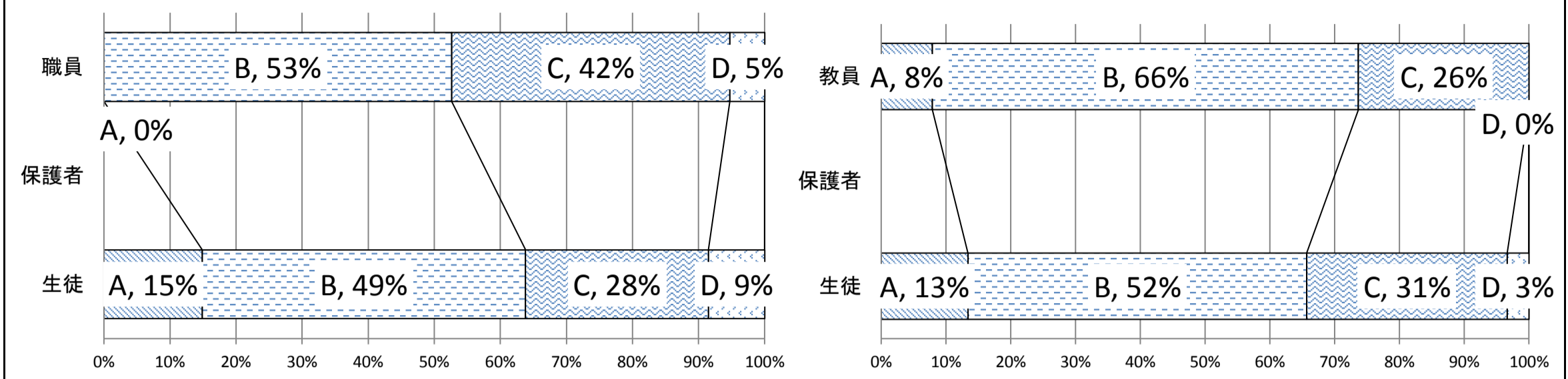


A: 当てはまる（そう思う） B: だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C: あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D: 当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 1

< 教務部 >

生徒	保護者	職員
あなたは、朝の基礎学習に取り組んで学力がついてきている。	-	生徒は、朝の基礎学習に取り組んで学力がついてきた。



分析

- 2回の結果を比較すると、生徒はA、Dが増加した。真面目に取り組んだ生徒とそうではない生徒の差が開いた結果である。
- 教員の評価はA、Bが大きく減少した。生徒の評価と開きが大きくなったのは、教員の期待と生徒の実感との差があると考えられる。
- 学年が上がるにつれて、生徒の意識が下がっている。学年が進むにつれてマンネリ化が進んでいる。

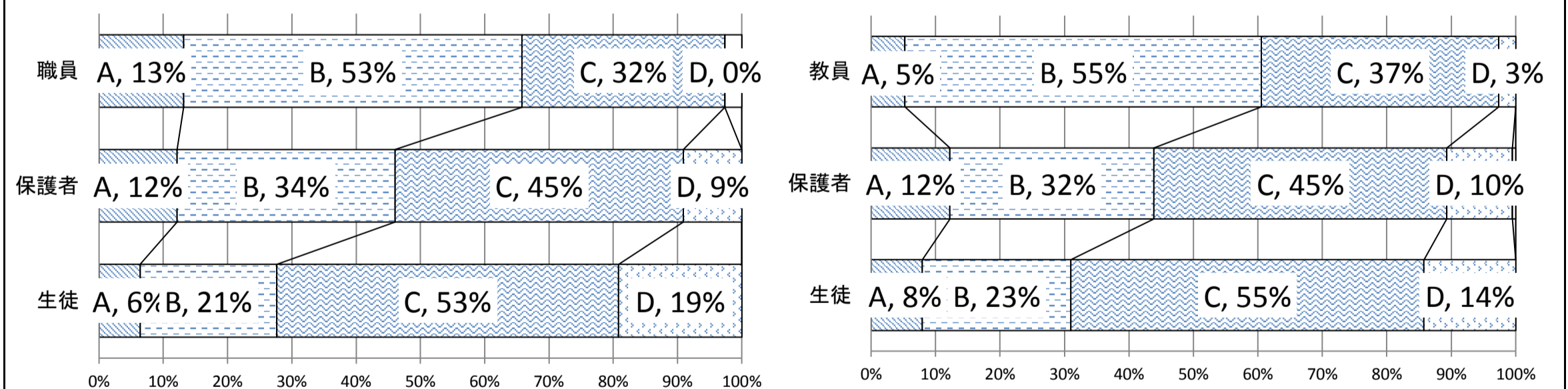
手立て【誰が何をするかを具体的に】

○ クラスによって取り組み状況に差があるため、担任と副担任の協力を密にしていく必要がある。毎朝2人の教員でHRに行くことで、生徒達は以前よりも落ち着いて授業に取り組むことができるようになってきているため、授業の内容と関連付けるなどして生徒の意欲喚起を図る。【担任・教科担当者】

意識調査No. 2

< 教務部 >

生徒	保護者	職員
あなたは、家庭で勉強をしている。	お子さんは、家庭で勉強をしている。	あなたは、家庭で学習できる指導をしている。



分析

- 教員のA評価が増加し、生徒に家庭学習をさせる工夫を実施してきたが、生徒・保護者の評価は1回目とほぼ同じ結果であった。
- 家庭学習をしていない生徒が70%を超えている。特に、基礎学力が身に付いていない生徒が家庭学習の習慣がない傾向が強い。
- 教員のA・B評価が上がっているのに反して、保護者と生徒が下がっている。家庭学習できる指導をしているにもかかわらず下降している原因は、「家庭」では学習していないが、「放課後の教室や塾」で学習しているのではないか。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

○ 難しい課題を出すと、独力で取り組めない生徒はすぐに諦めてしまう傾向があるため、生徒の学力に応じた課題を準備する。また、生徒が必要と感じる内容の課題を選ぶことも大切である。【教科担当者】
 ○ これまで家庭学習が身に付いていない生徒に高校から習慣を付けさせることは難しいと考える。放課後などを活用して、基礎学力が身に付いていない生徒に学習の機会を作る事が必要である。【教科担当者・学習支援員】

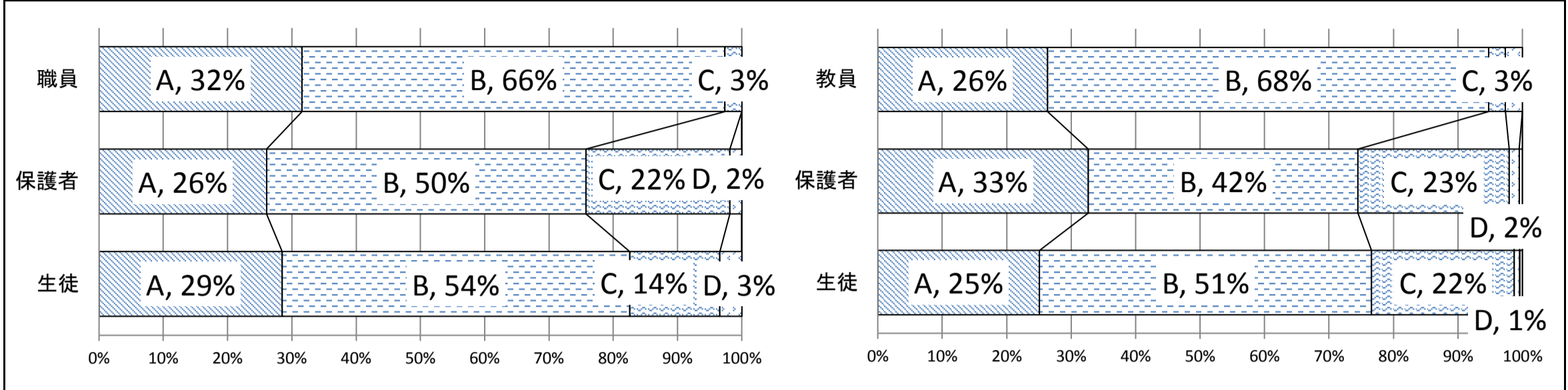
平成30年度 福島県立相馬農業高等学校 学校運営・運営ビジョンに関する意識調査（左2回目・右1回目）

A: 当てはまる（そう思う） B: だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C: あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D: 当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 3

<教務部>

生徒	保護者	職員
先生方はわかりやすい授業の工夫をしている。	あなたは、授業参観の機会があれば参加したいと思っている。	あなたは授業の工夫改善に努めている。



分析

- 教員、生徒ともにA・Bの合計が1回目よりも増加した。教員の工夫が生徒に伝わっている結果となった。
- 保護者の評価ではC・D合計が24%である。約4分の1の保護者が学校の授業にあまり関心が持っていないという結果であった。

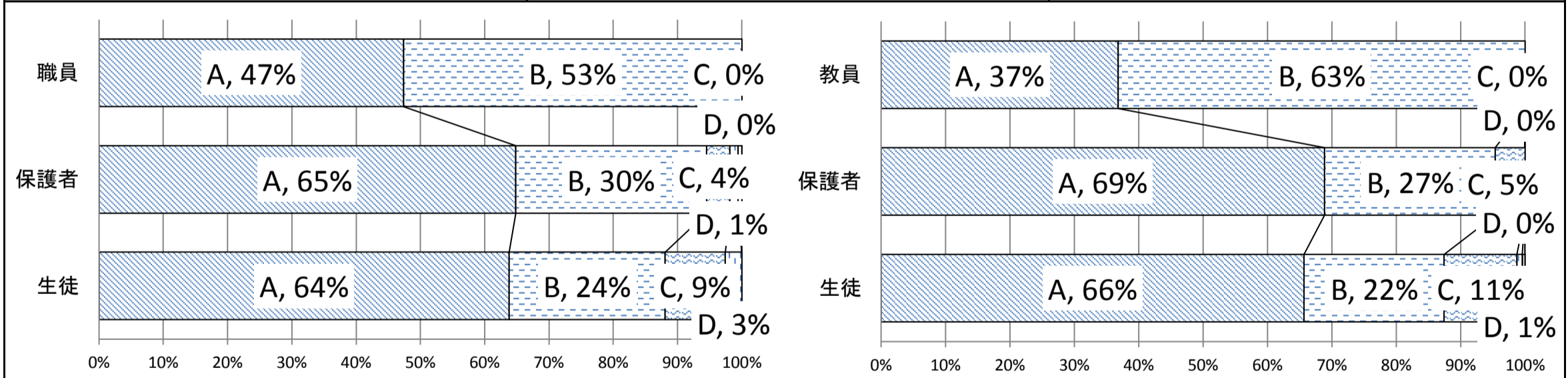
手立て【誰が何をするかを具体的に】

- 「わかりやすい授業」から「学力定着」に確実につながるように、教員側のさらなる工夫が必要。【全職員】
- 本校は、芸能発表や相農ショップなど保護者が気軽に学校に来ることができる機会が多い。もっと情報発信を行い、保護者に来校する機会を増やし、関心向上を図る。
- ホームページに事後の報告だけではなく、予告記事を積極的に載せる。【総務部】

意識調査No. 4

<生徒指導部・保健部>

生徒	保護者	職員
あなたは、遅刻・欠席・早退をしないように心がけている。	あなたは、お子さんが遅刻・欠席・早退をしないように努めている。	あなたは、生徒が遅刻・欠席・早退をしないように指導している。



分析

- A+Bの割合は、教員が100%（前回比±0）、保護者が95%（同±0）、生徒が88%（同±0）だった。
- 教職員で、Aの割合が前回比+10%だった。保護者、生徒でDの割合が微増した。
- 生徒学年別のA+Bの割合は、1年生が94%（前回比+5）、2年生が91%（同+7）、3年生が79%（同-10）だった。学年が上がるにつれて数値が低下する傾向にある。
- 欠席、遅刻、早退はほぼ毎日ある状況が続いている。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

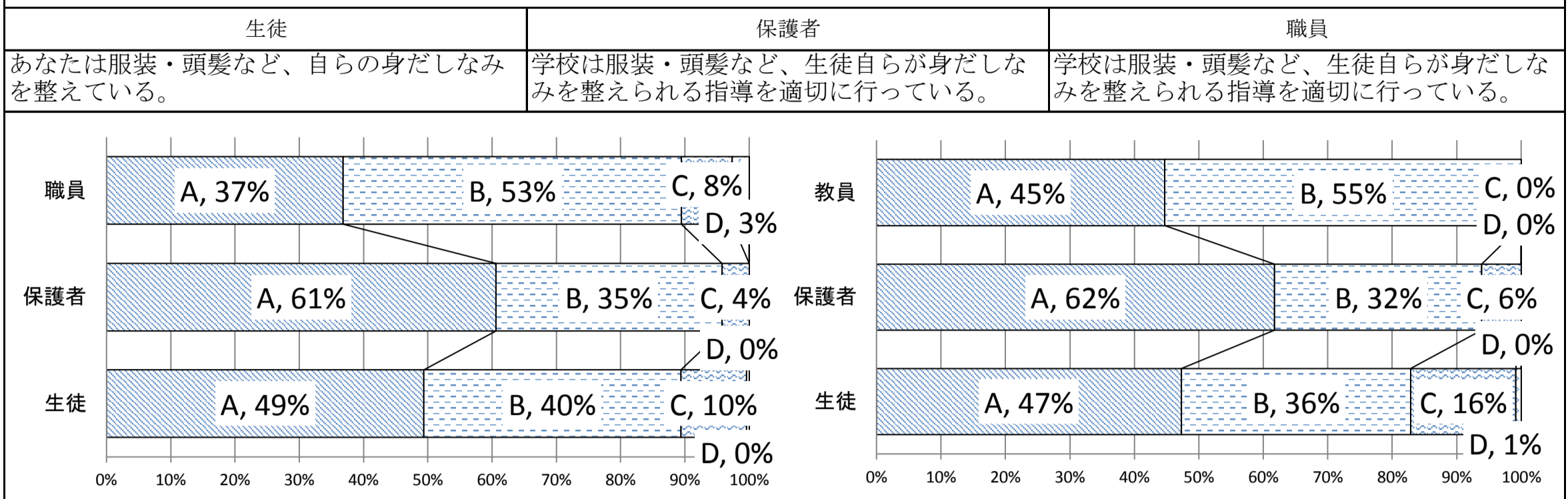
- 教員と生徒の関わり、教員と保護者との連携、学校内では生徒指導部、養護教諭との連携を引き続き意識していく。【全職員】
- 保護者で「朝は子供に会わない」という意見があり、生徒と保護者の関わりという面でも改善の余地があると考えられる。
- 保健部より等で生徒や保護者へ働きかけたり、進路指導との関連を図ったりして継続して支援していく。【保健部・進路指導部・生徒指導部】

平成30年度 福島県立相馬農業高等学校 学校運営・運営ビジョンに関する意識調査（左2回目・右1回目）

A: 当てはまる（そう思う） B: だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C: あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D: 当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 5

<生徒指導部>



分析

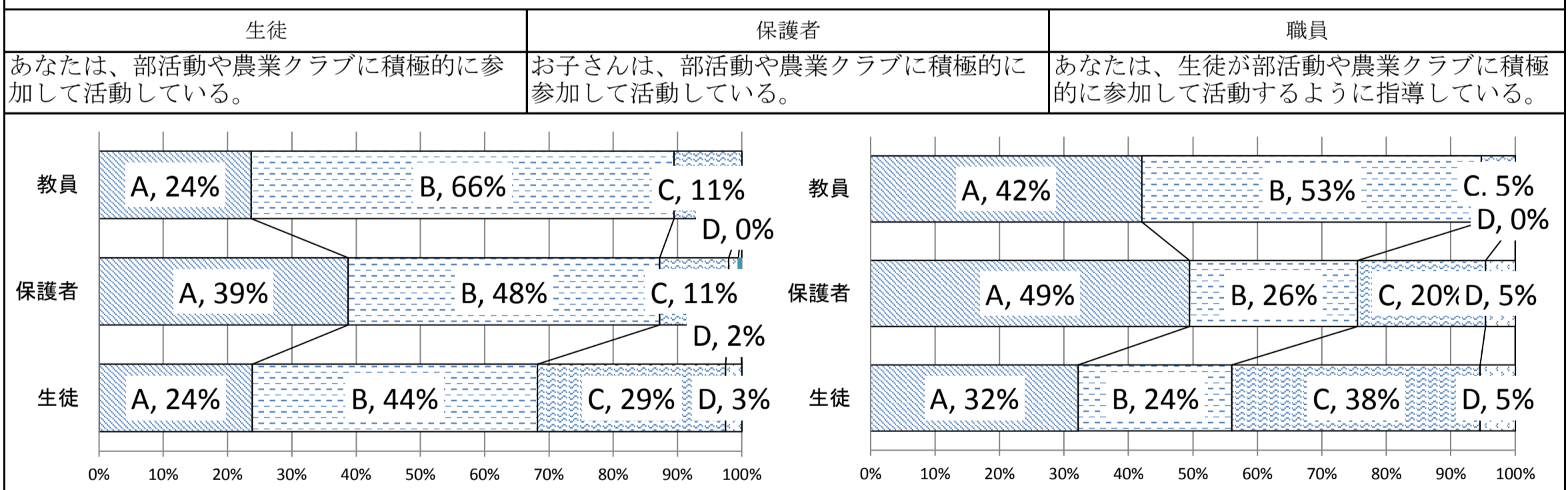
- A+Bの割合は、教員が90%（前回比-10）、保護者が96%（同+2）、生徒が89%（同+6）だった。
- 教職員で、A+Bの割合が前回比-10%となってしまった。反対に保護者、生徒では割合が微増した。
- 学年別に見ると、A+Bの割合が増加している。
- 教員の服装・頭髪指導に対する共通理解が不足していた面もあった。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

- 教員間の共通理解を図り、継続的に指導を行う。【全職員】
- 着こなしセミナーを実施する。【生徒指導部】

意識調査No. 6

<生徒指導部・農業部>



分析

- 3年生は、出場する大会もなくなるのでA+Bの値が少なくなると思われる。
- Dの値が減っているのが効果が見られる。
- Aの値が全対象で減少している。特に、教員の減少が著しい（前回比-18%）。
- 学年別に見ると、学年が上がるにつれてC、Dの割合が増加する。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

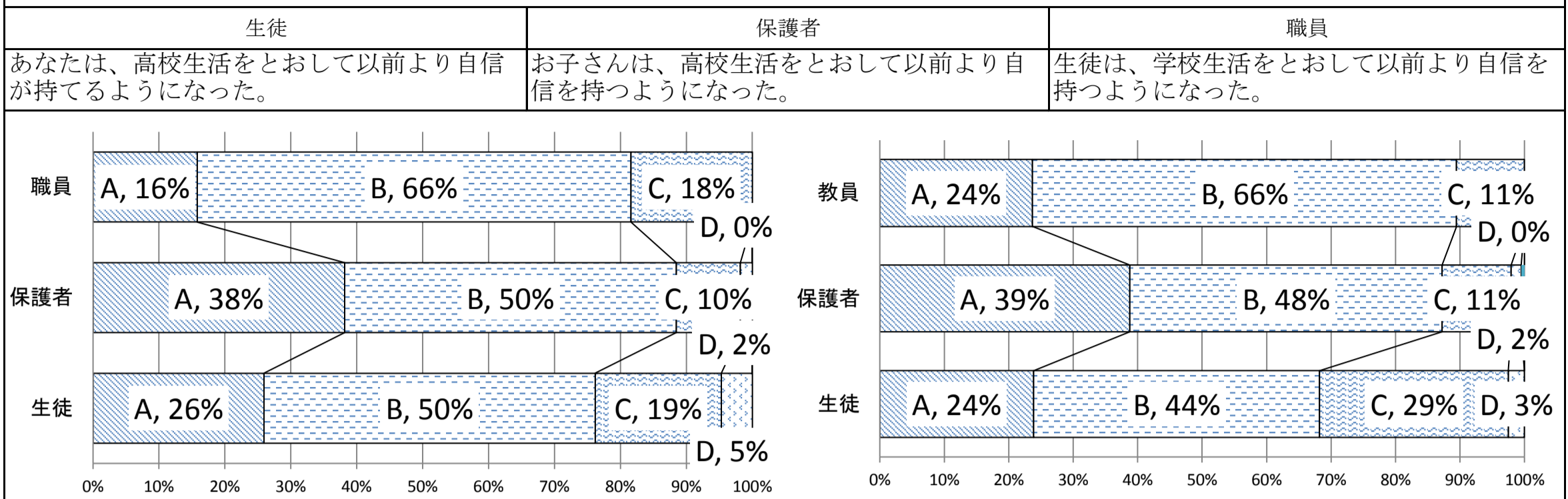
- 参加していない生徒を参加させる工夫し、進路活動に結びつける指導をする。
- 教員の共通理解を図り、教員自身が積極的に指導できるよう、組織的に取り組む。
- 1年生のうちから、積極的に取り組む意識付けを行う。
- 生徒や保護者に通知するために、活動の年間計画をたてる。【各顧問】

平成30年度 福島県立相馬農業高等学校 学校運営・運営ビジョンに関する意識調査（左2回目・右1回目）

A: 当てはまる（そう思う） B: だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C: あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D: 当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 7

<生徒指導部・保健部>



分析

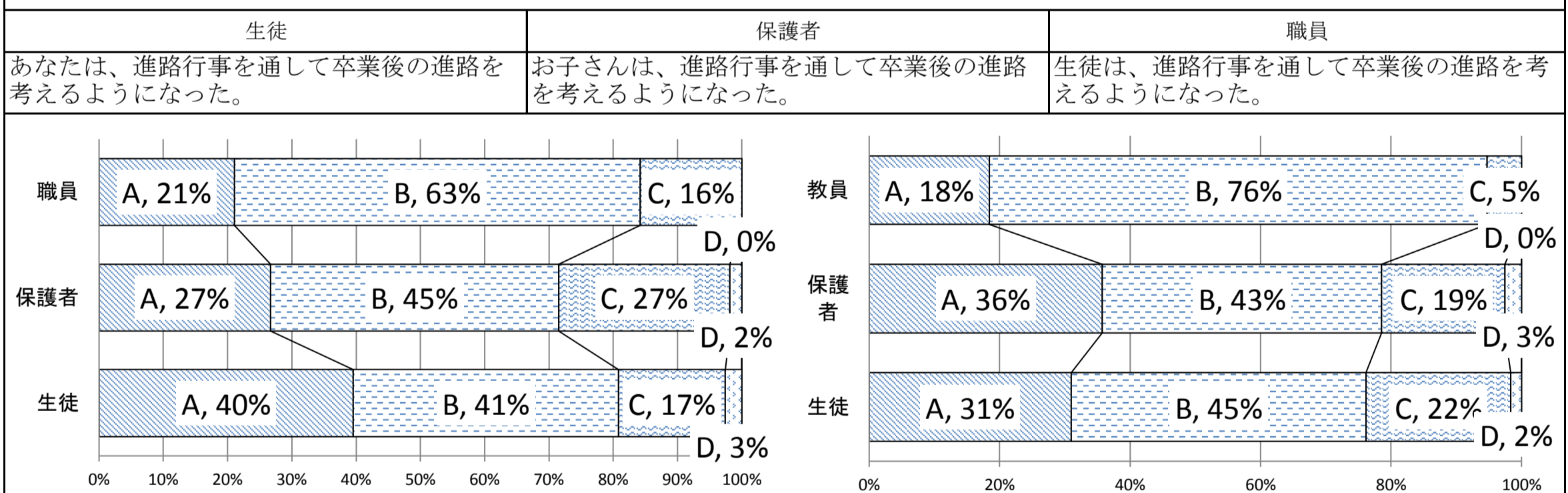
○A+Bの割合は、教員が82%（前回比-8）、保護者が88%（同+1）、生徒が76%（同+8）だった。
 ○生徒学年別のA+Bの割合は、1年生が90%（前回比+10）、2年生が76%（同+4）、3年生が61%（同+11）だった。学年が上がるにつれて数値が低下する傾向にある。
 ○A+Bの割合について、教員は下がったが、生徒は上がった。前回同様、教員の意識と生徒と意識とで差が見られる。
 ○Dの理由として「自分を出せない」「自信をもてるようなことはしていない」「（部活動で）先生も部員も来ない」等がある。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

○教員間の情報交換やスクールカウンセラーとの連携を図っていく。【保健部】
 ○授業や部活動等で生徒の頑張りに対して正当な賞賛をすることで、自己肯定感・自己有用感を高める。
 ○Dの理由に対して、教員側で生徒に働きかけられる余地はまだあると考えられる。教員も一生懸命な姿を見せる。【全職員】

意識調査No. 8

<進路指導部>



分析

○職員・保護者から見て、生徒の意識向上の実感がない。
 ○3年生は進路決定の時期（1回目）、1年生は職業インタビューの後（2回目）の意識が高くなった。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

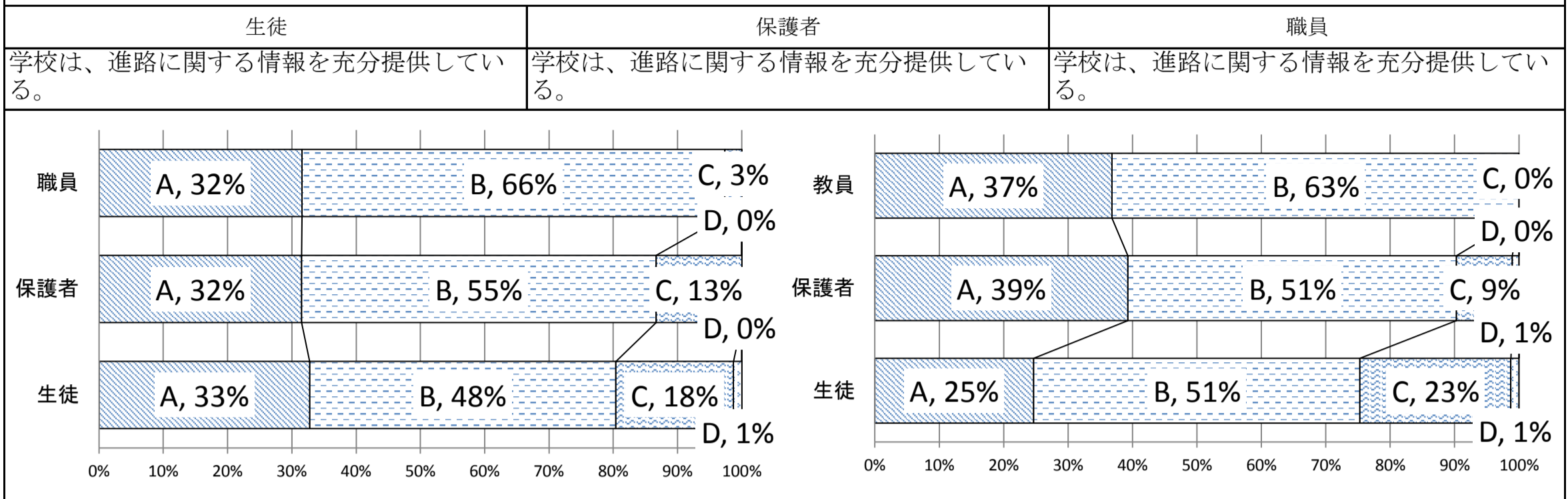
○学年経営に先立ち、進路目標を数字などで具体的に決め、職員間で共通理解を図る。
 ○学年・進路指導部が、進路行事の案内や実施内容を一斉メールなどの方法を活用し、各家庭に知らせる
 ○学年だより、進路だより、面談等を通して、行事後は報告に加えて家庭でお願いしたい指導を明示する。【学年・進路】
 ○行事後は、目標から逆算しての成果や課題について、職員間で振り返りを行う。【各部】

平成30年度 福島県立相馬農業高等学校 学校運営・運営ビジョンに関する意識調査（左2回目・右1回目）

A: 当てはまる（そう思う） B: だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C: あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D: 当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 9

<進路指導部>



分析

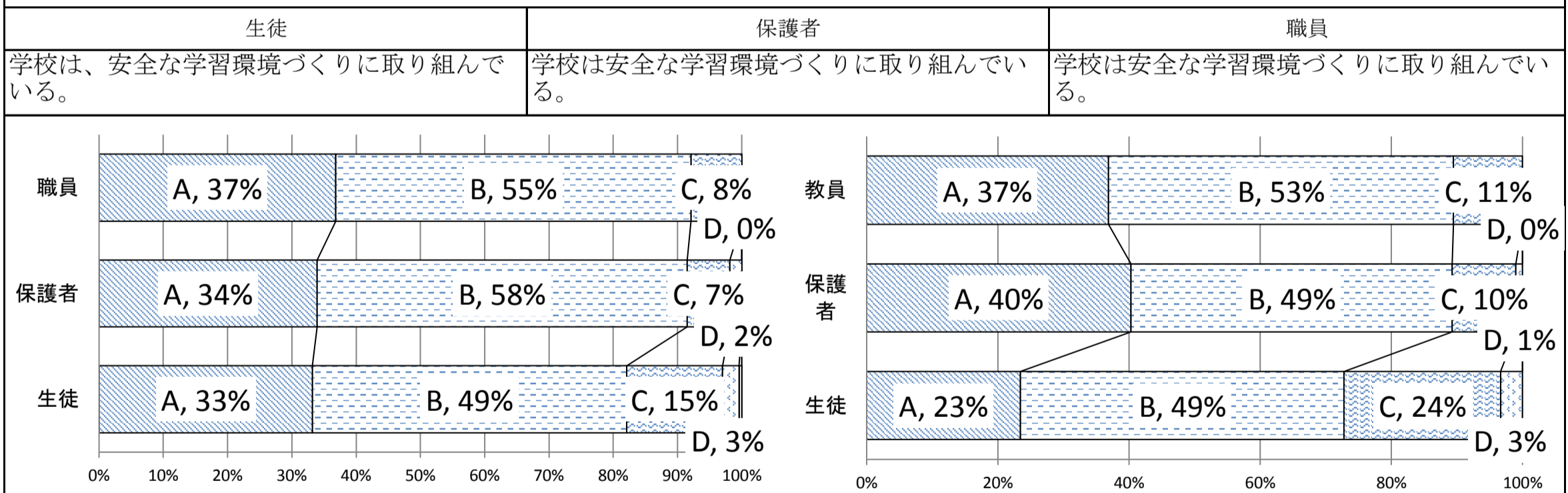
- 情報提供のタイミングにより学年によって差がある。
- 1年生は意識も高くなって来たので、進路情報に目を向けるようになったのではないか。
- 進路指導の仕方によって意識が変わるのではないか。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

- 進路指導部は、何を提供するか共通理解を持った計画的な提供を心がける必要がある。
- 学年は、生徒・家庭がどのような情報がほしいか検討し、進路指導部と連携して情報を提供する。
- ホームページや一斉送信メールなどを活用し進路情報を提供する。【進路指導部・総務部】
- 進級する際に、前年度の進路の手引きを家庭に持ち帰らせる。【担任】

意識調査No. 10

<保健部 総務部 農業部>



分析

- A+Bの割合は、教員が92%（前回比+2）、保護者が92%（同+3）、生徒が82%（同+10）だった。
- 生徒学年別のA+Bの割合は、1年生が89%（前回比+8）、2年生が87%（同+16）、3年生が69%（同+2）だった。学年が上がるにつれて数値が低下する傾向にある。
- Dの理由として、生徒からは「他のクラスがうるさい」、保護者からは「エアコンがほしい」という意見が挙げられた。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

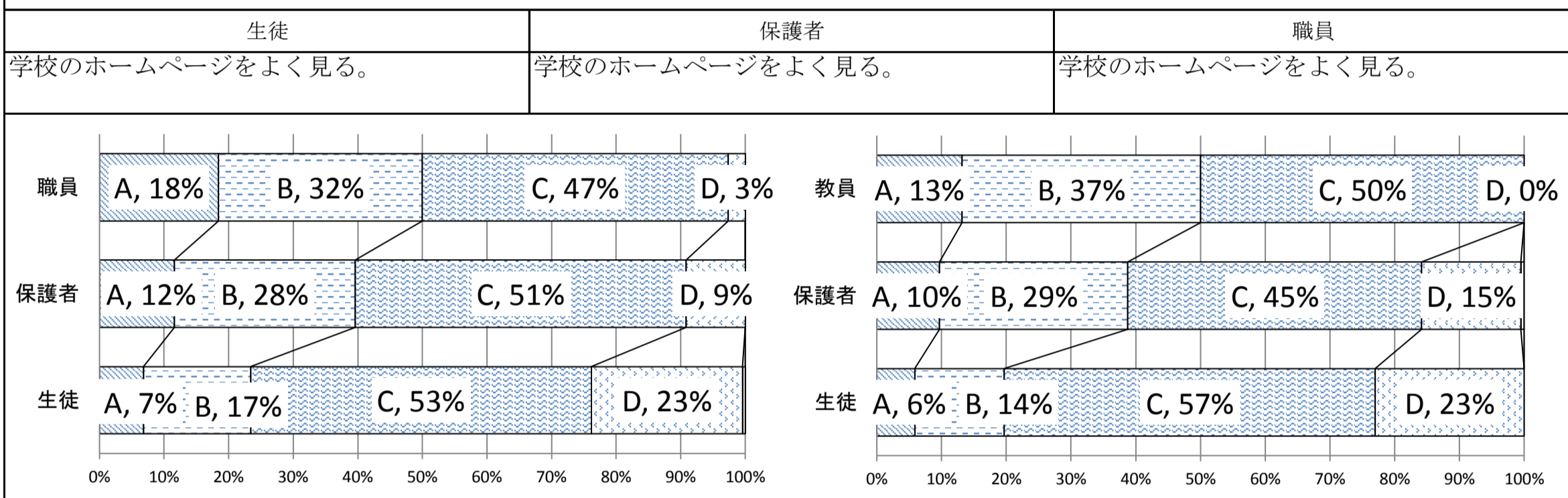
- 生徒は年度が進み、学校生活に慣れてきたことが考えられる。生徒が教室や学校を自分の居場所として考えられるようにしたい。【全職員】
- 慣れにより、ルールやマナーへの意識が薄くなっている生徒もいる。それを迷惑と感じている生徒もいるということを改めて伝えていく必要がある。自分だけでなく、みんなにとっての安全を意識させたい。【全職員】
- エアコンの設置が予定されているので、熱中症等への心配も軽減されることが期待される。
- エアコン使用時のルール等を検討し、生徒が正しく効果的に使用できるように検討する。【保健部・総務部】
- 農業実習における安全管理、未然防止等を推進する。【保健部・総務部・農業部】

平成30年度 福島県立相馬農業高等学校 学校運営・運営ビジョンに関する意識調査（左2回目・右1回目）

A：当てはまる（そう思う） B：だいたい当てはまる（だいたいそう思う） C：あまり当てはまらない（あまりそう思わない） D：当てはまらない（そう思わない） 無回答

意識調査No. 11

<総務部・農業部>



分析

○1回目と比較して、職員、保護者、生徒共にAの割合が高くなった。今学期後半に、ホームページを頻繁に更新した結果が、1回目よりもよい評価につながったのではないだろうか。
 ○生徒よりも保護者の方がホームページを見ている。

手立て【誰が何をするかを具体的に】

- 身近な記事をホームページの題材とすることを心がける。【全職員】
- 「ホームページをよく見ている」という声が保護者から聞こえるので、今後も今年度の更新回数を維持できるように努力する。
- 総務部でホームページの年間計画を年度末に検討し、年間を通じて計画的に更新でき、一部に負担がないようにする。【総務部】
- 定期的な発信をする。【総務部】